

東南アジア社会の原像
——その文化人類学的考察¹⁾——

飯 島 茂*

A Note on the Basic Structure of South-East Asian Society

Shigeru IJIMA

The prototype of mainland South-East Asian Society seems to have formed in its most northern part where hill and valley people coexisted and conflicted for many centuries. The author assumes that the inhabitants there would have organized "tightly" structured social systems based on patrilineage, because of the unfavourable natural environment and unstable social-political circumstances. One finds much more "loosely" structured social systems based on bilateral kinships among their plains cousins in the southern and coastal parts of the areas because of the favourable natural and socio-political habitats. There, the inhabitants are very unlikely to form corporate groups which go beyond the family- and village-levels. Accordingly, *Sinicization* and *Indianization* would have been necessary for the people to form supra-local solidarities through urbanization and state-building, and I propose a hypothesis in this connection.

はじめに

「アジアはひとつなり」とは岡倉天心の有名な言葉である。当時、欧米の帝国主義の強圧のもとに呻吟し、苦悩しているアジアを目撃しながら、天心の詩人的感受性はかれにアジアをひとつの運命共同体として把握させたのであろう。

しかしながら、近年目覚ましく発展したアジア研究の成果を踏まえると、アジア全体はもちろんのこと、その一部に過ぎない東南アジアさえをも、もはや「ひとつ」とはいえないことがわかる。

だが第二次世界大戦後、アジア研究が、そして東南アジア研究が急速に進み、飛躍的な展開を見れば見るほど、また、その分析が精緻化すればするほど、アジアとか東南アジアといった研究対象の全体像がますますつかみにくくなりつつあるようだ。そこで、本稿においては、これまでなされてきた研究成果にもとづいて、アジアの中心部にある東南アジアの大陸部すなわちインドシナ半島に焦点を当てて、この社会の原像を求め、それを形成している論理について

1) 本稿作成にあたっては、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究「中印文明接触地帯の社会と文化」の討議に負うところが大きい。記して、参加者の皆さんに謝意を表わしたい。

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

考えてみることにしよう。なお、念のため付け加えると、本稿は東南アジア史の解明を目的として書かれたものではないので、通時的、共時的記述や分析をおこなう場合にも、かなり時間系列を無視したことを記しておきたい。

I 民族形成の背景

東南アジアにおける民族形成には、いまなおいくつかのなぞが秘められている。それはこの地方の過去を物語る文献資料の存在がきわめて限られていることにもよるだろう。その理由として考えられるのは、東南アジアは中国文明やインド文明、それにイスラム文明や西欧文明が到来する以前には、ほとんどの民族集団が固有の文字を持っていなかったことにも原因がある。また、文化の質が元来石とかレンガというよりは、木とか竹のように植物的なものによって支えられ、痕跡を残しにくかったことにもよるだろう。しかも、東南アジア全体としては、熱帯のモンスーン地帯に位置していて、一年の大部分は高温多湿な気候が支配している。このため、その風土は物質的にも、知的にも、過去の蓄積を容易ならしめるより、現実の生活をむしろ容易にするほうに作用しているのではないか。

このようなエコロジカルな背景のもとにあって、東南アジアの民族形成については、ある程度伝承とか説話にも頼らなければならないのかもしれない。大づかみにいって、それらによると、東南アジアの諸民族の形成はかれらの祖先たちが、大昔に北方の“故郷”から南方に向けて、民族大移動をおこなった“歴史”と深くかかわりあっているかのように伝えている。たとえば、ビルマのカレン族などの起源に関する伝承は H. I. Marshall によると、次の如くである。

「カレン族の口伝はあきらかにかれらがかならずしも現在住んでいる場所にいたのではないことを示している。もっとも目につく物語りはカレン族の伝説的な始祖である“Htaw Meh Pa”についてである。かれは北方にある未知の国に多くの家族と住んでいた。そこでは、畑は大きいいのししに荒らされた。当の家父長(Htaw Meh Pa)は外に出て、いのししたちを殺した。しかし、息子らとその死体を運びに行った時には、片方のきばが折れていて、すり切れていたので、1本しか見つけることができなかった。その老人(Htaw Meh Pa)はいのししのきばでくしを作った。ところが、それを使用した者はすべて不老の力を得たので、一同はびっくりした。(かくして)間もなく、この地方は人口が過剰になり、一行は新しい、豊かな土地を探しに出かけて行った。……」(Marshall, 1922, 5)

もっとも、このような民族集団の北方起源説は、なにもカレン族のような山地民や少数民族に限ったことではない。たとえば、総人口が三千万人以上を誇り、大陸部東南アジアではもっとも有力なタイ系民族集団においても同様である。すなわち、中国の貴雲高原の谷間の平坦地において、古い時代から水田稲作を中心とした農耕生活をおくっていたタイ系の諸民族集団は、

やがて今日雲南省といわれる地方の南部に当たるシブソンバーナーに王国を建設した。ところが、十三世紀に元のフィビライの軍隊によって蹂躪され、王国は滅亡した。伝統的な歴史家によると、これが契機となって、タイ族は四散し、今日見るように、東西に約千五百キロメートル、南北に約二千キロメートルに及ぶ、大陸部東南アジアの中心部の広大な範囲に分布するようになったと考えていた。国別に見ると、北方からは中国の雲南省、広西チワン族自治区、ラオス、タイ国、ビルマのシャン州、西方には実にインド領のアッサムに至る諸地域に分布していて、東南アジア最大の民族集団を形づくっているといわれている。

また、少なからぬ言語学者は諸言語の精密な比較研究を通して、東南アジアの、そしてインドシナ半島における諸民族の歴史や民族移動の跡を追跡しようと努力しているかのようである。しかしながら、これにも問題がないわけではない。Leachの言うように、「ひとつの母語を話す者はおたがいにある種の社会的連帯の感情を必然的に共有しているだろうが、関係している個人が歴史的に祖先を共有していることを必然的に意味しない。」(Leach, 1965, 51) 論旨を明確にするために卑近な例をあげると、あるアメリカ人がMaryというファースト・ネームやSmithというサーネームのようなアングロサクソンの名前を持っていたとしても、彼女もしくは彼がアングロサクソンであり、イギリスから渡って来た移民の子孫であることを意味しない。すなわち、彼女はもともとラテン系の人でMariaというファースト・ネームを持っていたのかもしれないし、アメリカに移住後名前を米国化したのかもしれない。同様に、Smithももともとは、ドイツ系のSchmidtだったのかもしれない。いや、アメリカの場合にはそれどころではない。MaryとかSmithといった名前を持ったアフリカ系やアジア系の人たちさえいるだろう。

また、先程述べた伝承や民話でさえ、ある“民族”の起源を知るうえで、問題がないわけではない。たとえば、再びアメリカを例にとると、アメリカの子供たちは小学校で、皮膚の色、目の色、出自のいかんを問わず、“われわれの祖先はイギリスから、メーフラワー号に乗って、思想、信条、宗教の自由を求めて、ニュー・イングランドのプリマスにやって来た……”と教えられ、信じて疑わないのである。これらのアメリカにおける諸例は、いささか極端な例かもしれないが、それでも言語や民間伝承の資料をもって、ある民族集団の“歴史”を知ろうとするのには、いろいろと困難な側面にぶつかることが分かるであろう。E. R. LeachやF. K. Lehmanも述べているように(Leach, 1954; Lehman, 1963)、現在のインドシナ半島の原住民がそのままの社会単位や文化単位として、“中国”から南下して来たという仮説は神話に過ぎないであろう。確かに、民族学、歴史学、言語学、考古学などのこれまでの研究によると、大陸部東南アジアにおいては、歴史的に見ると、北方から南方に向けての民族の移動波があった形跡が十分にうかがえる。だが、現存の民族集団は長い歴史の過程の中で、隣接した民族集団が相互作用によって影響を与えながら、今日見られるような諸民族の輪郭が形成されてきた

と考えるほうが合理的であろう。

以上、大陸部東南アジアにおける民族形成の背景について述べてきた。そこで、さらにインドシナ半島における社会の原像とその底辺につらぬかれている文化的論理について、社会人類学的ならびに生態学的に接近をこころみてみよう。もちろん、本稿のような小論文でこのようないざいそれた研究目的を十分達することができるとは思えない。しかしながら、いざさか大胆なスペキュレーションをおこなうことによって、将来の研究の展望を開きたいと思うのである。

Ⅱ 多様性と統一性

大陸部東南アジアは自然的にも文化的にもきわめて多様性に富んだ地域である。筆者がすでに別のところでも言及したように（飯島1973，7～8），ビルマの北端には，東ヒマラヤ山脈の東のはずれにある東南アジア最高峰のカカルポラジの雪山がそびえている。中国の雲南省に端を発する山並みは，西方に向かってはビルマのシャン高原からカチン高原にのび，南方に向かってはベトナム，ラオスの北部に拡がっている。そこには亜熱帯的大陸性気候のもとに，照葉樹林帯が発達している。このあたりはわれわれ日本人が持っている東南アジアの自然に対するイメージとはかなり異なっている。また，これとはきわだった対照を示す自然的景観はインドネシアやフィリピン，シンガポールのような島嶼部東南アジアはもちろんのこと，大陸部でもマレーシアをはじめ海岸部に帯状に分布している。そこでは，年間を通じて温度較差は少なく，しかも降水量に恵まれているので，この熱帯的海洋気候のもとに，“昼なお暗き”熱帯降雨林のジャングルが発達し，われわれの東南アジアに対するイメージにいちばん近い自然的景観が形づくられている。この二つのきわめて対照的な自然的景観にはさまれるように発達しているのは，インドシナ半島の中心部で，海洋的気候の影響の少ない熱帯林地帯である。その森林は湿潤な熱帯降雨林とは異なり，どちらかというところ，乾燥したまばらな森林の連続である。時には，サボテンやユーフォルビアのような乾燥地帯を思わせるような植物を目にすることも少なくない。従って，この自然は開墾などによって，少し人の手が加わると，すぐにサバンナ化しかねないのである。

以上のように，大陸部東南アジアは自然地理的に見ても，きわめて多様性に富んでいるけれども，文化の面でもいちじるしく多彩であるといえよう。たとえば，組織宗教の面から見ても，ベトナム北部は大乗仏教，ビルマ，タイ国，ラオス，クメール，ベトナム南部は上座部（小乗）仏教，マレーシアは島嶼部東南アジアと同様にイスラム教を信仰している者が多い。また言語に関しても，インドシナ半島はたいへん複雑な様相を呈している。大づかみに分類しただけでも，シナ・チベット系，オストロアジア語系，オストロネシア系の三大語族からなっている。もっとも，タイ語族はこれまでシナ・チベット系として分類されてきたけれども，最近の

研究によれば、むしろタイ・カダイ系に属していて、島嶼部東南アジアの言語との関係が深いのではないかという説も一部でとなえられるようになっている。そのため、比較的近年に出版された東南アジアの民族集団に関する概説書によれば (LeBar *et al.*, 1964), この地域で話されている数多くの言語は、四大語族に分類されている。いずれにせよ、これらの大語族群をさらに分類してゆくと、その区分の仕方によっては数十、あるいは数百の言語に分けられるであろう。

このような立場から大陸部東南アジアを眺めてくると、第一の印象はこの地方は実に多様性に満ちあふれた地域であるということである。しかしながら、詳細に観察すると、これはあくまでも真実の一面を表わしているのに過ぎないことが分かる。たとえば、家族に示されているような社会構造、いわゆる^{アミズム}精霊信仰、稲作を中心とする生産技術の性質、女性の役割の大きさと地位の高さなど、東南アジアにもいろいろな文化的な通項が存在している (Burling, 1965, 2)。

アメリカの文化人類学者R. バーリングはこの点について次のように述べている。「このように共通の特徴がひろく分布していることは、東南アジアの多様性の底に統一性が横たわっているという印象を与えている。ところが、逆説的に言うと、この地域の多様性こそが決定的な統一性をもたらしているのである。

東南アジアのいずれの国にも山地民と平地民がいて、それぞれの生活様式の差異一時には抗争—がわれわれのこの地域に対する理解の整理を助ける鍵になるのではなからうか。東南アジアにおけるいかなる国家をとってみても、相対的に同質的で、多数の人口からなっている平地民がその中核をなしている。この種の平地民は単一の主要な言語を話し、世界宗教のひとつに帰依していて、集約的な水田稲作に生活を依存している。ところが、いずれの国も山地民という少数民族をかかえていて、かれらはきわめて異質的である。山地民は雑多な言語を話し、かれら自身の政治的統一性は存在しない。しかも、近年に至るまで、平野部とはほぼそととした政治的紐帯以上のものは持っていなかった。山地民は通常焼畑農業をおこなっていて、平地民に比べると、仏教、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒になる速度がきわめて緩慢である。」(Burling, 1965, 4) しかれば、このような対生 (dichotomy) はどのようにして発生し、歴史の中で展開したのであろうか。次にこれについて述べることにしよう。

Ⅲ 山の民と谷間の民

今日の大陸部東南アジアを巨視的に眺めると、紅河、メコン、メナム、サルウィン、イラワジなどの大河の中流、下流地域に人口が集中していて、そこに都市が発達し、現代の国家の心臓部を形成している。しかしながら、これらの地域はどちらかというところでは歴史的には新開地であろう。むしろ、今日の大陸部東南アジア社会の原型は、大河の上流、しかもその支流などを中心とした、山と谷間でできた自然的景観の中で形成されたのではなかったらうか。現在、われ

われの前には歴史資料とか考古学的遺跡が十分に存在していないので、そのプロトタイプがどの地方で、どのようにしてできあがったかを実証することは困難である。現状から類推して、ある程度分かることは、山の民の多くは大陸部東南アジア北部の山岳地帯において、昔は採取・狩猟を中心に、時代がくだっては焼畑による粗放的な農業に従事していたのであろう。そしてまた、かれらの生活はきわめて自給自足的であったとも考えられる。というのは、山の民のいとなむ生産活動の技術水準では、経済的な剰余をうむことは少ないので、市場経済の発達はあまり期待できなかったのではなかろうか。従って、山の民の経済生活はいきおい自給自足的にならざるを得なかったのだらう。

山の民の生活が自己完結的であったのは、なにも前述のような物質的、経済的側面に限らなかつた。かれらの精神的な生活においても、また社会生活においても、きわめて限られた範囲の中で、生を受け、成長し、そしてこの世から去っていった。山の民は総じて祖先信仰を基軸としたいわゆるアニミズムの世界で生活しているのである。そのため、多くの場合、今日においてすら、かれらの生活は自己もしくはその延長線にある血族、親族、姻族などの限られた社会的拮がりの中でいとなまれている。それを象徴する事柄として現在でも山の民は自分たちで自分たちの民族集団を呼ぶのに、“人間”という自称を使っていることから十分推測できるのである。自分たち以外は、人倫をわきまえる人間とは考えなかつたのであろう。たとえば、カレン族などがカレン族自身に言及する時に、“パカニョ”（人間）というのがその好例である。このようなわけで、多くの山の民が自分たち以外の民族集団に、きわめて異質的なものを感じ、かれらを疎外し、みずからもかれらから疎外していたとしても不思議ではなかろう。

一方、山の民の世界である大陸部東南アジア北部の山岳地帯の山間には、各所に小さな盆地が散在している。そこがやがて大河の中流・下流地域に都市をつくり、国家を形成していった平野の民の“故郷”なのである。仮に、このような所に住んでいる人たちを谷間の民と呼んでおこう。

大陸部東南アジア北部のこのような谷間の住民は、大昔においては、おそらく今日の山の民ときわめて類似した生活様式をいとなんでいたのではなかろうか。いや、むしろ、現在山の民と呼ばれている人たちの中には、かつては谷間の民であったものが、後から来た技術的にも軍事的にも優勢な民族集団に追われて、山岳地帯に移り住んだ形跡のある者もいるようである。たとえば、タイ国北部のラワ族などもこの類型に属しているのではなかろうか。

ところで、谷間の民も生産の技術水準が低い段階では、もともと採取・狩猟をおこなっていたのが、次第に焼畑に近い粗放な農耕生活に移っていったのだらう。しかしながら、さらに谷間の民の祖先たちは、平坦な地形や水利の良さを利用し、比較的早い時期から水田稲作を導入し、その後の社会的発展の基盤をつくっていったのだらう。

谷間の民は当時の技術水準では、水田稲作によっても、焼畑農業に比べて、きわだって高い

単位面積当りの収穫量を得ていたとは思えないけれども、陸稲に比べると、干ばつなどの天災に比較的強い水田稲作の属性に助けられ、毎年割合安定した収穫をあげられるようになったのではないだろうか。換言すると、当時の農業の低生産性をもたらした単位面積当りの収穫量の低さと、それに加えて、天候に左右される年ごとの収穫量の不安定性を、水田稲作技術の導入により、少なくとも後者がある程度克服することによって、谷間の民は比較的安定した生活を送るようになったのではないだろうか。

それなら、このような“豊かな”谷間の民と“貧しい”山の民の間には、どのような相互関係があったのであろうか。前にも触れたように、このような大陸部東南アジアの前史を裏付ける歴史や考古学的資料はほとんど存在していない。そこで、数多く存在する民族誌の中から、このようなイメージにいちばん近い例を紹介し、参考に供そう (von Fürer-Haimendorf, 1962)。

話題の場所は、インドのアッサム地方のスバンシリ地区 (Subansiri Division)、インド領にあるとはいっても、この地方は北方を除いては世界最高の降雨量によって形成された果てしない熱帯性降雨林のジャングルが覆い、インド大陸の中心部から押し寄せてくるヒンドゥイズムやイスラムの文化的圧力をさえぎっている。また、北方には大ヒマラヤ山脈の障壁がチベットや中国の文化の侵入をかたくなにはばんでいる。その意味では、地理的には一応南アジアに属してはいるものの、この地方は文化的に見ると、大陸部東南アジア社会の古層を根強く残しているといえよう。

アッサム・ヒマラヤが南斜面の外縁部が、比較的なだらかな岳陵地帯をつくり出しているあたりに、ダフラ族 (Dafla) とアパタニー族 (Apa Tani) というチベット・ビルマ語系のモンゴロイドが住んでいる。前述のように、かれらは未だインドや中国、あるいはチベットの文明のひだに組み入れられていないいわば“未開”民族である。しかしながら、両民族集団のうちアパタニー族は岳陵地帯にできているポケット状の盆地に住み、かなり古い時代から、水田稲作の技術を身につけた農耕民族である。一方、ダフラ族のほうはアパタニー盆地の周囲の山岳地帯に住んでいて、狩猟・採取と同時に、粗放な焼畑農業に従事している。アパタニー族とダフラ族は、近隣に住んでいるので、かなり共通の文化的要素を共有しているけれども、経済生活の相違は、かれらの民族集団全体の性格をかなり左右しているようである。すなわち、水田稲作を中心に生活をいとなんでいるアパタニー族は、定着的で安定した生活をいとなんでいて、農耕民らしく、平和愛好的だという。一方、ダフラ族の狩猟・採取、焼畑といった山棲みの生活様式は、かれらを漂泊的かつ勇猛果敢な民族集団に仕立て上げている。

ダフラ族は水田稲作農業をおこなっているアパタニー族に比べると、相対的に経済的安定を欠いているので、その山の民としての機動力や“軍事力”を利用して、時たま谷間にあるアパタニー族のむら[・]を攻撃する。この場合、若干の農産物を略奪したり、女性をさらったりするこ

とはあるけれども、おもな目的は捕虜を入手することであるという。ダフラ族に連れ去られたアパタニー族の捕虜は通常虐待されるようなことはない。というのは、アパタニー族の捕虜はダフラ族にとって重要な人質であり、近い将来両者の間でおこなう取引における重要な“ドル箱”であるからだ。たいてい、人質と交換に、ダフラ族はアパタニー族から、かなりの量の米を入手できるからであるという。かくして、ダフラ族は食糧を入手し、アパタニー族は“平和な”生活が約束される。そして、比較的“豊かな”アパタニー族と“貧しい”ダフラ族の間にバランスが保たれ、この地方の社会的均衡関係が維持されているのであろう。これは E. R. Leach がビルマ北部で観察した (Leach, 1957)、谷間の水田稲作農民シャン人と山地焼畑民のカチン族との関係のプロトタイプのように思われる。この場合は、段階は一段と進んでいて、カチン族がシャン人たちを定期的に襲撃し、物質的利益を入手するに留まらず、時には事前に交渉し、シャン人たちは保護金 (protection money) を支払うことによって、カチン族からの攻撃を防ぐだけでなく、他の民族集団からの襲撃をもかわしているのである。換言すると、カチン族は谷間の食糧や富を必要とし、シャン人は山の民の“軍事力”を必要とし、その間で共生関係が成立しているのである。しかも、カチン族にとってはシャン人が中国の雲南省とビルマ中央部を結ぶ交通の要衝に形づく市場町も生活に不可欠である。さらにその関係はこのように即物的な関係に留まらず、カチン族のような山の民にとっては、シャン人のような谷間の民が持っている仏教に象徴されるような文明とか封建的な統治技術なども魅力のひとつになっていて、共存関係を結ぶ基盤を強めているようである。

ところで、このような山と谷間の社会の共存・拮抗関係もやがてバランスを崩し始める。それは前にも触れたように、物質面においては、谷間の水田稲作民が相対的に安定した農業生産によって“豊かな”生活が約束されたからでもあろう。さらに平坦で、比較的恵まれた交通条件も通商を発達させ、かれらにいつその富をもたらしただけなのであろう。しかしながら、社会的側面においても、谷間の民と山の民との間に格差をつける原因が、前者の経済生活を支えている労働過程の中にあっただけではなからうか。

谷間の民が水田稲作技術を習得することによって、手に入れることのできた利益は、前にも述べたように、経済的な生産性の向上だけではない。かれらが水田稲作栽培の技術を習得することによって、同時に灌漑排水の技術をも獲得したことは、谷間の社会のその後の発展を考えるうえで、きわめて注目すべきことなのである。

というのは、狩猟・採取経済はもちろんのこと、焼畑農業と比較しても、水田稲作農業はいろいろな意味で人手がかかる作業が多い。まず、水田を造成するのから始まり、天水田の場合を除くと、灌漑排水の設備を考えると、それがどんな未開な技術段階であるにせよ、共同労働とかある程度の組織づくりが不可欠になる。それは第一義的には家族間の共同労働であり、さらには自然村内部とか民族集団内部の協同作業でもあろう。しかしながら、水田稲作をかなり

の規模におこなうようになると、以上のような in-group だけの共同作業では必要労働をまかなえなくなってくる。他村とか他の民族集団との協力が不可欠になる。やがて、灌漑排水の設備がある規模以上になると、平均化された農民だけの手に負えなくなり、専業者や専門家、さらには強力なリーダーの出現が望まれるようになる。しかも、このような第一次的な社会的装置を維持、発展させるためには、徴税とか管理をつかさどる第二次的な社会的装置が不可欠になってくる。かくして、大陸部東南アジア北部の山間盆地を中心に、かなりの昔から水田稲作民を基礎とした“部族”国家やミニ国家が形成されるようになったのだろう。もちろん、その物質的基盤は比較的安定した水田稲作農業によってもたらされたことは言うまでもない。

IV 大陸部東南アジア社会の論理

大陸部東南アジアの原住民は、谷間に住むか山間僻地に住むかにかかわらず、もともとは祖先信仰を軸として、“血の原理”を優先させて社会の凝集をはかってきたと考えられる。しかしながら、前節で述べたように、谷間におけるエコロジーの差異や水田稲作の導入といった技術革新による経済的な生産性の向上、またそれと平行した社会的な生産性の発展によって、“国家”が出現すると、社会や文化の構造は大きく変化する。経済の余剰が生まれ、商業が発達し、他の地域社会やその住民との接触や交流がしげくなると、それまでの血縁主義が修正を余儀なくされる。人々は丘陵地帯に散在するポケット状の盆地で、血縁や姻戚関係の壁の内で、排他的原理をかざして、ぬくぬくと生活してゆくわけにはゆかなくなる。すぐれて、他の地域社会の民族集団に属する者とも仲良く生活しなければならなくなる。そのため仏教のような人すべて同胞、万人平等をたてまえとするような組織宗教が大きな役割を果たすのも不思議ではない。しかも、すでに水田稲作を導入し、谷間に住んでいるものは、出自や民族集団、また住んでいる地域社会のいかに問わず、灌漑排水をめぐる共同作業を発展させなければならぬ段階になると、仏教のような組織宗教の果たす機能は重要になってくる。ちょうどこの現象は、古代インドにおいて、ヒンドゥー・カースト制度の血縁ならびに疑似血縁制度により、がんじがらめになった社会において、都市の商業民が自由な商業活動を推進してゆくために、カーストの壁を突き破る哲学的な“武器”として、仏教を重用したことと平行現象をなしている。

ところで、大陸部東南アジア社会の原像を求めて、E. R. Leach はビルマを題材として、山と谷間の問題について次のように言及している。「大づかみにいって、山の民は父系的であり、階層的であり、谷間の民は非単系的親族組織を持っていて、それはカリスマ的専制主義と結びついている。わたくしが提唱する説明は、谷間の民は社会構成 (social organization) と政治体制はインドより継承したのに対し、山の民は社会構成を商業や親族組織と共に中国から受け継いだ」(Leach, 1961, 51) としている。しかしながら、筆者は Leach の意見の前半、すなわち、

谷間の民が社会構成や政治体制をインドから継承したという見解は十分肯定できるが、山の民が社会構成を商業や親族組織とともに、中国から受け継いだという意見には賛成できないものがある。

というのは、大陸部東南アジアのエコロジーや歴史を考えると、その社会の原型が形成されたのは、むしろその北部から中国の貴雲高原にかけての山岳地帯ではなかろうかと思われるからである。古代の人間にとっては、世界中数多くの人々がそうであったように、広漠とした平野よりはエコロジカルな適応を考えると、そこは自然的に亜熱帯から暖温帯の地方にあっても、高冷地である上に、地味は必ずしも豊かではないし、おうとつ（凹凸）の多い地形は決して農業生産には好適とは思えない。しかも、当時支配的であったと思われる“部族”社会にありがちな相互の敵対関係による社会的緊張は、山の民の社会にもなんらかの圧力を加えずにはおかなかったのではないか。筆者は山の民が祖先信仰を軸として、父系的な単系社会をがっちり固め、揺ぎない“固く組織された”社会を形成してきたのはこれが主因ではないかと考える。したがって、北方の中国的社会で、これと同様な祖先信仰をてこととして、強い父系的結合の社会を維持しているとすれば、むしろ、華中、華北の自然がある意味で大陸部東南アジア北部高地の自然に比べるとさらに“苛酷”であり、また北方からの^{ほくてき}北狄や^{せいじゆう}西戎などの“乾燥地帯の暴力”（梅棹，1967，94～96）の絶えまない脅威がそこの住民たちをして、古代の、そして山岳地帯からの社会的“工夫”を維持させるのではないかとさえ考えられる。

単系社会、とりわけ父系社会は後で述べる双系社会に比べると、それ自体で何か小廻りのきく、核のある社会を形成するのに便利なような気がする。すなわち、単系社会は少なくとも物的にはもちろんのこと、知識とか伝統などの蓄積といった文化的、社会的側面においても、さらには自分たちの集団の防衛やすぐれて他集団に対する攻撃といった軍事面に関してもかなり有効な社会的、政治的装置であるようだ。従って、大陸部東南アジアの山岳地帯以北のきびしい自然条件や、“乾燥地帯の暴力”に常時さらされている社会環境においては、きわめて有力な武器となって人々に寄与するのではないだろうか。もっとも、父系社会のような単系社会の欠陥として、in-groupの凝集力としては強力に作用するのに対し、それ自体が“血の原理”によって、“血”を共有しない者に対しては排他性を発揮するために、ある集団が他の集団と連合することによって、大きな規模の社会として発展することがいちじるしく妨げられることもある。

一方、谷間の民について Leach が述べているように、かれらがインドから継承した遺産はかなりのものであったと考えられる。すなわち、本節の初めのほうでも触れたように、谷間の民がなりわい（生業）の必要上、灌漑排水技術を導入したり、さらには仏教に帰依していったという事実は、それらの文化的要素の起源や発展過程からいって、間違いなくインド化のひとつの現われといっておかろう。

以上のほかに、次のような歴史過程や社会発展が谷間の民とその系譜の上にある平野の民のインド化を促進したのではなかろうか。というのは、前にも述べたように、大陸部東南アジア社会のプロトタイプは、山とか谷間とか棲んでいる場所の相違にもかかわらず、かなり多くの者がおしなべて、祖先信仰を中核とした単系社会を持っていたのではないかという推測をおこなった。ところが大陸部東南アジア北部で、さらに北方に向かって行った民族集団以外で南下した者についてみると、かれらの占拠した土地のエコロジーは次第に変わっていった。暖温帯は亜熱帯に変わり、高冷地は低地の暖地に変わった。好転したのはなにも気候条件だけではなかった。山間の源流の狭い谷間は、下流にくだるほど次第に谷幅を拡げ、可耕地が多くなる。さらに、山間を流れる川が大盆地や平野に出た所に発達する扇状地を越え、肥沃な沖積平野に入ると、農耕に関する条件はいっそう良好になる。

このように原住民の生活条件が好転し生存を維持するのに困難が少なくなり、全体として生活が楽になると、人々は何も狭い環境にひしめき合いながら、小さく、がっちり団結する必要がなくなったのではないだろうか。加えて、豊かな自然に恵まれれば、せちがらく物質的にも知的にも馬車馬のように蓄積をする必要が少なくなり、また、“金持ちけんかせず”で、日常的に相互に襲撃しあい、生活の糧を入手しなければならぬ必要性も減少しよう。このような訳で、“南の国”の恵まれた自然的ならびに社会的環境のもとにあつては、父系社会のような排他的単系社会を維持してゆく必要性が少なくなるのではなかろうか。ということは、人々の多くが、大陸部東南アジア北部の山岳地帯から離れ、河川の流域を南下すればするほど、社会から父系的色彩を払拭し、双系的傾向を強めていったのではないだろうか。とりわけ、メコン、メナム、イラワジのような大河の下流の低湿地帯の開発が進み、人々が自然環境に恵まれ、人口圧力が低く、しかも中央政府の直接的な“保護”のもとにおかれると、その双系色を強めている社会はさらに凝集力を失い、J. F. Embreeをはじめ、多くの文化人類学者をして“緩く組織された”と呼ばせるような社会を形成したと思われる。

もちろん、エコロジーの変化による社会変化というものは、なにも谷間の民、平野の民にだけ妥当するものではない。山の民においても、巨視的に観察すると、北方の厳しい環境のもとにあるカチン族やチン族が父系社会を強固に守っているのに対し、南方の比較的恵まれた環境にあるカレン族などが双系的傾向の強い社会をつくっていることなども、このようなことを示唆しているのであろう。

おわりに

東南アジア社会を成立させている論理的な背景について、これまで、駆け足で、文化人類学的な考察をおこなってきたけれども、都市や国家の成立については、本稿において、十分な接近をこころみることができなかった。この点については、別の機会に稿を改めるとしたいが、

最後にその展望について触れ、おわりの言葉に代えたいと思う。

大陸部東南アジア，すなわちインドシナ半島の文化や社会を見ると，この地域の名称が示すように，インドもしくはシナ（中国）の影響が色濃く残っている。住民のうちで，中国文明の影響を強く受けたベトナム人たちを除いても，タイ系，クメール系，ビルマ系やあるいはマレー系住民においてさえ，基本的には農耕民的色彩が強い。そのため，かれら自身の中から出てきた“都市化”とか国家形成は，せいぜい地方の市場町の程度であり，またタイ系の言語で *muang* とか *mông* と呼ばれている地方の小政権であつたに過ぎない。

都市の発達でさえ，自生的には遅々としたものであつたので，国家の形成が進まなかつたのは当然だろう。“国”がある程度形をなし始めたのは，せいぜい原住民の有力者たちが，何らかの形でインド文明を受容し始めてからであつたといわれる。それととも，王宮や寺院の周辺に若干の水田地帯があるだけのものであり，G. Sjoberg がいう前産業型都市 (Preindustrial City)²⁾ の水準にすら十分達していなかつたようだ。これらは分かっているだけでも，古いところでは，チャンパ，扶南，ドゥバラバティーとか，時代がくだっても，アンコール・トム，スコタイ，アユタヤ，チェンマイ，アワ，アラカン，タットゥン，マニプールなど，枚挙にいとまがないほどである。しかしながら，当地域に本格的な前産業型都市が発達するのには，華僑や印僑のような外来の商人などの多数渡来が必要だったのである。

大陸部東南アジア各地のこのような社会的未発達な状態は，やがて，近世になって，イギリスやフランスの帝国主義の支配への道を開いてしまったのであろう。

さらに，大都市ができたり，近代的な意味での国民国家ができるためには，欧米，あるいは日本などの進出による外圧の衝撃が必要だったのかもしれない。

参 考 文 献

- 飯島 茂 (1973) 『カレン族の社会文化変容——タイ国における国民形成の底辺』創文社。
石井米雄編著 (1974) 『タイ国——ひとつの稲作社会』創文社。
岩田慶治 (1964) 「北部タイにおける村落社会の解体と再編成過程」『東南アジア研究』第2巻第2号，pp. 2-29。
梅棹忠夫 (1967) 『文明の生態史観』中央公論社。
矢野 暢編著 (1977) 『東南アジア学への招待』NHKブックス。
Burling, Robbins. 1965. *Hill Farms and Padi Fields—Life in Mainland Southeast Asia*. New

2) 特徴は以下のようなものである。(Sjoberg, 1965)

- (1) 市場を経由して，原料，食糧を農村から入手する。
- (2) 手工業の中心地。
- (3) 政治の中心地。
- (4) 宗教の中心地。
- (5) 教育の中心地。
- (6) 人口は（後背地）農民の10パーセントくらい（約10万人くらい）。
- (7) 都市計画の欠如。
- (8) 民族集団，カースト，階級などの棲み分け。

- Jersey: Prentice-Hall.
- Fürer-Haimendorf, C. von. 1962. *The Apa Tanis and their Neighbours*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Leach, E. R. 1954. *Political Systems of Highland Burma*. London: G. Bell and Sons.
- _____. 1961. "Frontiers of 'Burma'," *Comparative Studies in Society and History*, Vol. 3, No. 1, pp. 49-73, The Hague.
- LeBar, F. M. et al. 1964. *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. New Haven: HRAF Press.
- Lehman, F. K. 1963. *Structure of Chin Society*. Urbana: University of Illinois Press.
- Sjoberg, Gideon. 1965. *The Preindustrial City—Past and Present*. Toronto: Collier-Macmillan.